

## 11 朝鮮解放直後におけるある労働者の日常

—仁川の電気工 I 氏の日記から—

太田 修

### 1. はじめに

朝鮮の解放後史に関する研究は1980年代以降に活発になされるようになったが、おもに政治史を中心に展開されてきた<sup>1</sup>。それは、解放、分断、戦争という事象がその後の歴史の展開に大きな影響を及ぼし、それらが今日の朝鮮半島、東アジアの矛盾の起源となっていることから、まずその歴史を政治史として分析し理解する必要があるためである。

一方、社会・文化史の面でも、1990年代以降に徐々に研究がなされるようになったが、政治史研究に比べて立ち遅れているのが実情である。解放後史を、より構造的に、より多様なものとして描き、理解するためには、政治史研究の蓄積の上に、あるいはそれと有機的に結びつけることによって、社会・文化史を叙述することが必要である。

本稿では、そうした問題意識から、解放直後の社会・文化史の一面を叙述するために、日記という個人が書いた記録を取り上げる。近代日本社会の日記を研究した西川祐子によると、日記は基本的に「国民教育装置」として活用され、普及していくが、そこから「意識的・無意識的に逸脱した」日記も書かれていき、日記における「規範の形成と逸脱のダイナミズム」

---

<sup>1</sup> 韓国 역사 연구 회 편 『새로운 한국사 길잡이』(지식산업사, 2008)の「현대」, 朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』(名古屋大学出版会、2011年)の「第8章 現代史」を参照。

に注目することが重要だという<sup>2</sup>。ここで取り上げる日記も、植民地支配下に書き始められたことから、植民地下の「国民教育装置」（正確に言えば「皇国国民教育装置」）であるものの、基本的には大日本帝国の日記の規範から「逸脱」したもので、その内容から見えてくるものは、解放直後を生きた一労働者の日常生活である。かつてノーマ・フィールド（Norma Field）が「日常生活の詳細しかある意味では信用できない」と書いて日常生活を歴史として考えることの重要性を強調したが<sup>3</sup>、本稿でも一個人の日常生活を歴史としてとらえ、解放直後の社会・文化の一面を明らかにしてみたい。

近年、朝鮮近現代史研究において、日記を対象にした研究が少しずつ出されるようになった。当初は、政治家・尹致昊<sup>ユンチホ</sup>や「郷村の儒生」らエリート<sup>1</sup>の日記を対象としたものだったが<sup>4</sup>、最近では政治家でも知識人でもない市井の人々の日記を対象とした研究が出され、植民地近代の様相や植民地支配から生じた矛盾といったものが描かれるようになった<sup>5</sup>。本研究も基本的にはそうした近年の研究の延長上に位置づけられるものだが、これまでの研究が植民地期以前の日記をおもに対象にしていたのに対して、本稿は解放後の日記を分析しようとするものである。

本稿で取り上げる日記は、仁川<sup>インチョン</sup>に住む労働者I氏が、1945年9月から1947年末まで書いたものである<sup>6</sup>。I氏の日記の分析をとおして、I氏の日

<sup>2</sup> 西川祐子『日記をつづるとのこと：国民教育とその逸脱』吉川弘文館、2009年、6頁。

<sup>3</sup> ノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』みすず書房、1994年、346頁。

<sup>4</sup> 김영희「일제 말기 향촌 유생의 '일기'에 반영된 현실인식과 사회상」『한국 근현대사연구』14, 한국근현대사학회, 2000, 김상태『윤치호 일기 1916~1943: 한 지식인의 내면세계를 통해 본 식민지시기』역사비평사, 2001.

<sup>5</sup> 板垣竜太「第5章 日記を通じてみた植民地経験」『朝鮮近代の歴史民族誌：慶北尚州の植民地経験』明石書店、2008年、同「戦時体制下ソウルの職工日記（1941年）について」油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会編『朝鮮半島のことばと社会：油谷幸利先生還暦記念論文集』明石書店、2009年。

<sup>6</sup> I氏の日記は、2007年の夏に仁川広域市水道局山タルトンネ博物館で展示されていた。筆者は、遺族の許可を得て、博物館が複写したものを複写させてもらった。現物は展示されていたのを見ただけで、直接手にとって見ることはできなかった。

常生活の諸相を描き、I氏がどのように解放を迎えたのか、I氏にとって解放とは何だったのかを考え、解放直後を生きた一庶民の日常の一端を明らかにすることが本稿の目的である。ただし、I氏を、解放直後を生きた朝鮮人の代表として考えたり、I氏の日記を、解放直後の社会・文化史全体像を描く資料として使ったりするのではないことはことわっておく必要がある。I氏は解放直後に仁川に居住していた一電気技師であり、I氏の日記はあくまでもそうした一個人が書いたものである。ここでは、そうした解放直後に生きた1人の労働者I氏の日常生活を描くことをめざす。今後、そうした庶民の日常史を積み重ねていけば、解放後の社会・文化史の全体像を描くことが可能となるであろう。

## 2. 日記とI氏

まず、I氏の日記とI氏について見てみよう。I氏の1945年の日記帳の日付は9月1日から始まっている。もともと8月以前の頁もあったようだが、日記帳からは外されている。1946年の日記は「NOTE BOOK」（進出版社）に書かれ、表紙にはI氏が「DIARY／1946／6／4279」と書いている。1947年の日記帳は市販のもので、やはり表紙に「日記 DIARY／4280／7／1947／7」と書いている。

1945年と1946年の日記は毎日書かれているわけではない。I氏は、祝祭日や特別な出来事があった日に1～2頁ほど書いている。ただし1946年は、日記帳とは別に毎日数行ずつ記入された簡単な日誌がある<sup>7</sup>。1947年の日記帳は1頁が5日分の記入欄に分けられていて、その日の出来事が毎日5～6行で記入されている。

---

<sup>7</sup> この日誌の表紙には「皇紀2595」「昭和十年1935」と書かれている。I氏は1935年の日誌帳を再利用したものとみられる。

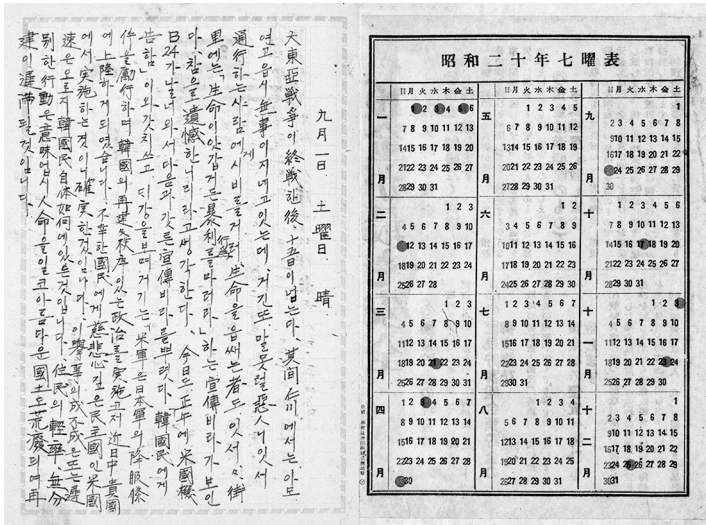


図1 I氏の日記：1945年9月1日

I氏は、記入欄に日付、曜日、天気、寒暖について書いている。ほかに祝祭日や特別な出来事があった日は、例えば「米軍仁川港上陸日」(1945/9/8)のように欄外に書き込むこともあった。言語は、数カ所に見られる日本語以外は、ハングルと漢字である。ただし、漢字には誤字が見られるし、ハングルも音をそのまま文字にしたもので不正確なところも見られる。また、祝祭日や特別な出来事があった日には、太極旗・<sup>むくひ</sup>槿の花の挿絵やスケッチ、絵などを描くこともあった。

日記の巻末には、その年に観覧した映画・演劇の「題目」「映画製作所」「劇場名」「観覧日」「料金」を整理した「映画及演劇観覧記録」や、I氏の学歴、職歴、本人を含む家族の誕生日、命日が記入された欄もある。それらと、2007年の企画展示<sup>8</sup>でのパンフレットの内容をまとめると、I氏の

<sup>8</sup> 註6を参照。

経歴および家族関係はおおよそ次のようなものだった。

I氏は、1926年5月6日（陰暦6月5日）に仁川府松峴<sup>ソンヒョン</sup>里（現在の仁川広域市東区松峴洞）で出生し、生涯そこで過ごした。普通学校を卒業したと思われ、1940年4月に京城電気株式会社（以下、京電）電気技術員養成所に入所、翌年3月に修了し、41年4月に京電仁川支店に入社し、電気技師（電気工）として働き始めた。48年7月に弘益大学仁川<sup>ホンイク</sup>専門学館夜間専門部に入学したが、翌年中退する。48年11月に結婚し、その後、3男2女をもうけた。1976年に<sup>ハングクチヨルリョク</sup>韓国電力株式会社（京電の後身）を退職し、商店を営むかたわら、統長<sup>9</sup>などを務め、2000年に死去した。

I氏は、1945年の時点で満19歳だった。当時、同居していた家族は、母、弟、妹2人だった。I氏の家は「糧穀店」を営んでいた。母が病身であったため長男であるI氏がその仕事を助けており、I氏が家計を支えていたようだ。弟と妹については、誕生日、ソウルに遊びに連れていったこと、受験以外は書かれていない。結婚して近くに住んでいる姉も1人いたが、やはりあまり登場しない。また、父の命日に祭祀<sup>チエサ</sup>を行ったとの記述から、父親は1942年に死去したことがわかる（1946/6/30）。

ここでI氏の日記の内容を見ていくうえで、次の2つの点はおさえておく必要がある。まず、I氏が仁川に生まれ、この日記を書いた当時も仁川で生活していた点である。仁川は、解放直後に米軍が最初に上陸した地域であり、その後も米軍の重要な拠点の1つであったため、住民にとっての米軍の存在がほかの地域よりも相対的に大きかったといえる<sup>10</sup>。後で見るようにI氏が仁川に上陸してきた米軍をいちはやく歓迎し、英語の勉強を始め、ハリウッド映画に夢中になるなど、「<sup>ミグク</sup>美国 [アメリカ]」の有形無形の文物に関心を持つようになったのは、「<sup>ミグク</sup>美国」の影響が大きい地域でI

<sup>9</sup> 統は、市の行政区域の1つで、동（洞）の下で반（班）の上。

<sup>10</sup> 나채훈, 박한섭 『인천개항사』 미개지사, 2006, 256쪽.

氏が生活していたことが関係していると思われる。

もう1つは、I氏が京電の電気技師だったという点である。I氏は、たしかに電気工という労働者であったが、京電という安定した会社の労働者だったという点に注意が必要である。京電は、後述するように、「電燈・瓦斯・電車の事業を独占経営」する「一大会社」であり、I氏はその電気事業部門で働く従業員だったのである。I氏が映画を見たり、ソウルに出かけたり、登山に出かけたりするなど、比較的娯楽を楽しむ生活ができたのは、京電という「一大会社」の従業員だったことによるものと考えられる。

このような点に留意しながら、I氏の日記を読み、解放直後のI氏の日常生活に分けいってみる。

### 3. 解放直後の政治的体験

#### 3-1. 米軍「歓迎」、「朝鮮解放」「朝鮮独立」

まず、解放直後にI氏がどのような政治的体験をしたのかを見てみよう。I氏は9月1日の日記に、米軍機 B24が撒いていった宣伝ビラ「韓国民に告ぐ」の内容を書き取り、米軍政は「不幸な国民に対して、慈悲深い民主国である米国が実施するもの」で、米軍の指示を守れば民主主義の下で幸福に生活できる時期が到来するだろうと書いている（1945/9/1）<sup>11</sup>。翌2日には、日本の降伏文書調印の新聞報道を見て「韓国も早く独立し、立派な韓国国民となって、活躍しなければならない」と記している（1945/9/2）。

8日の「米軍仁川港上陸日」には、欄外に「WELCOME U.S. ARMY」と書き、この日I氏が「仁川裁判所屋上」で見た光景を描写している。まず目に入ったのは、仁川港の「米国艦隊」、上空の飛行機大編隊、上陸した米

---

<sup>11</sup> 日記の引用部分は筆者が翻訳したものであり、翻訳の際、原文の旧漢字は新漢字にした。なお、誤字・脱字は基本的にそのままとし、筆者による補正・説明は〔 〕で記した。

軍人が裁判所屋上に立てた「米国旗」だった。「朝鮮独立万才」などのスローガンを書いた旗を持って行列をしていた約1000人の朝鮮青年に、仁川警察署の警官が射撃して負傷者が出たため「歓迎」は中止された。市街を行進する「米国軍人」は活発で親切だった（1945/9/8）。翌9日にも、「海上と陸地を進む自動車〔揚陸艦〕や「小型無線電信機」をみて驚き、「立派な国民主義の国の美国に、小さく憎らしい帝国主義日本が戦争を引き起こしたのだから、負けて当然だったのだ」と感想を書いた（1945/9/9）。

23日には、「仁川市民全部」が旗行列を行って「朝鮮解放」を祝賀し、連合軍を熱烈に歓迎した。「米国旗」と「朝鮮旗」が翻り、「朝鮮解放に万歳」と書かれた長旗の下では「全仁川小学生」が歌を歌い、人々は「朝

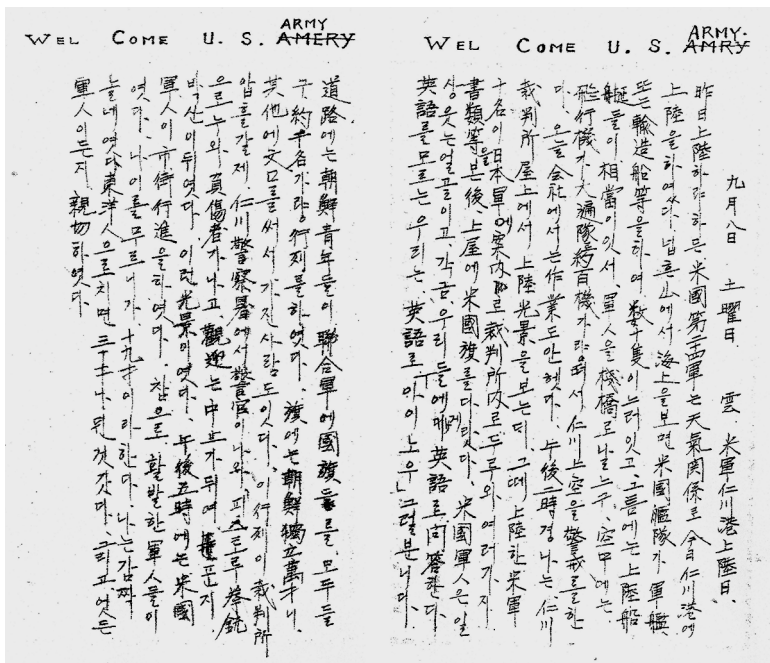


図2 1氏の日記：米軍仁川港上陸日（1945年9月8日）



鮮風俗」で「朝鮮音楽」に合わせて踊った。警官もすべて朝鮮人に変わっていた。I氏はこうした状況から「朝鮮人のことを愛してくれる美国軍に感謝した」と書いている(1945/9/23)。

解放直後に19歳のI氏が日記で強調したのは、「WELCOME U.S. ARMY」の思いであり、「朝鮮解放」への喜びと「朝鮮独立」への願いだった。

### 3-2. 李承晩、金九の「帰国」、反託運動支持

I氏は、<sup>イ</sup>李承晩<sup>スンマン</sup>、<sup>キム</sup>金九<sup>グ</sup>の「帰国」についても日記に書いている。10月18日には、李承晩のラジオ演説を聞いて「<sup>ママ</sup>李聖萬晩博士が三十三年ぶりに帰国し、入京した」〔取消線は原文ママ〕と記し、仁川・<sup>チェムル</sup>濟物浦<sup>ポ</sup>の「連合軍歓迎」「<sup>ママ</sup>李聖晩博士歓迎」祝賀式に参加して「感激とうれしさで涙があふれて前が見えないほどだった。また、朝鮮自主独立が完成することを祈るばかりだ」と書いた(1945/10/18)。

11月23日には、「ホッジ中将」のラジオ発表で「金九先生還国」を知り、「先生は、わが民族の解放と国家の独立のために、その生活の大部分を苦難の闘争にささげ、今日、ひと時も忘れられなかった故国の土を踏んだ」と記している(1945/11/23)。

12月28日からは信託統治<sup>12</sup>問題について次のように書いている。新聞は「ソ連は朝鮮の信託統治主張」、「米国は朝鮮の即時独立主張」し、ラジオは米ソ英中4カ国による朝鮮分割信託統治の決定を伝えた(1945/12/28)。31日には、京電仁川支店でも「愛国心」「信託統治反対」の輿論が高まり、正月から一週間の予定で「託治反撃示威運動」を行うことになった(1945/12/31)。これにI氏は、「本当に朝鮮に独立がなく、4カ国に信託統治されることで

---

<sup>12</sup>第2次世界大戦の戦後処理をめぐるモスクワ3国(米・英・ソ)外相会議は、1945年12月28日に朝鮮統治に関する決定を発表した。その決定は、朝鮮臨時政府を樹立し、朝鮮を米・英・ソ・中4カ国による5年間の信託統治下に置くというものだった。



あれば、ぼくは最後まで反対し誠意をかけて闘おう。〔中略〕ぼくは朝鮮が即時独立することを祈っている」(1945/12/31)と書き、信託統治反対運動と「即時独立」への支持を表明している。

その後I氏は、1946年8月に「燃えあがる愛国心をもって一日も早く独立しようという気持ち」で、「大韓独立促成国民会」に入会した(1946/8/1)。大韓独立促成国民会とは、1946年2月に、李承晩の独立促成中央協議会と金九の信託統治反対国民総動員中央委員会が統合して発足した右派の政治団体だった。I氏は、「連合軍歓迎」・「李聖晩<sup>ママ</sup>博士歓迎」祝賀式に参加したり、金九の「還国」を歓迎したり、大韓独立促成国民会に入会したりしていたことからわかるように、右派の政治路線を支持していたといえよう。

### 3-3. 「朝鮮解放」、「朝鮮自主独立」への希望

ただし、こうしたI氏の米軍歓迎、信託統治反対、李承晩・金九支持という政治的立場は、さほど確固たるものではなかったように見える。「大韓独立促成国民会」に入会した日に「今後徐々に政治方面の辞〔知〕識を広げ、時局の常識を広げ、ときどき支部に行つて講演も聞き、他人に引け劣らないようする決心だ」と書いた(1946/8/1)。しかしその後、とくに政治に関心を持つようになったり、政治活動に積極的に参加するようになったりした形跡はみられない。では、I氏の上記のような政治的立場は何によるものだったのだろうか。

1946年3月1日の「己未三一運動独立宣言記念日」には、同僚のRと弟妹を連れてソウルへ行き、「普信閣<sup>ボシシカク</sup>の鐘を鳴らす式」に参加した。I氏は、ホッジ、ラーチ、李承晩、金奎植<sup>キムギョシク</sup>らが参席していた式典の様子、「ゴーンという鐘の音は解放自由の鐘の音」だと感じたこと、式典終了後の旗行列やソウルの街里に「万歳の声」が響きわたった情景を描写している。そして、太極旗がさげられた鍾<sup>チョンノ</sup>路普信閣の絵に「二十七年ぶりに再び聞く普信閣の自由の鐘の音」と記入している。

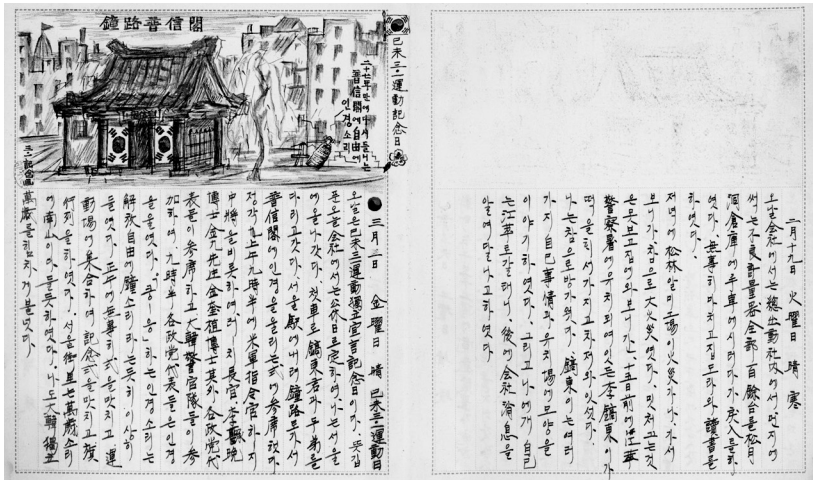


図3 I氏の日記：己未三一運動独立宣言記念日（1946年3月1日）

このI氏の描写には、米軍政による文化統治の一端が垣間見られる。米軍政は、3月1日を慶祝日と定め、「解放」と「大韓独立」を象徴する「普信閣の鐘の音」に「自由の鐘の音」を接続することによって、朝鮮民族の国家建設とアメリカ主導の自由主義陣営の建設がひとつのものを朝鮮の人々に見せようとしていた。I氏もその中で「大韓独立万歳を力いっぱい叫んだ」のである。

同じ年の「八・一五解放記念日」にもI氏は「京城」に向かった。記念式典には、花電車や花自動車が登場し、各官庁職員、学生、朝鮮少年軍、国防警備隊・海岸警備隊、米軍が行列に参加した。ホッジ、アーノルドらが挨拶し、李承晩、金九が祝辞を述べた。米軍軍楽隊が朝鮮国歌を、朝鮮高麗交響楽隊が米英ソ中の国歌を演奏し、京城合唱団が解放記念歌を合唱した。

この「八・一五解放記念式場」と「八・一五記念風景／市街行列」の光景は、日記の上欄にペンとクレヨンで描かれている。米軍政庁（旧総督府

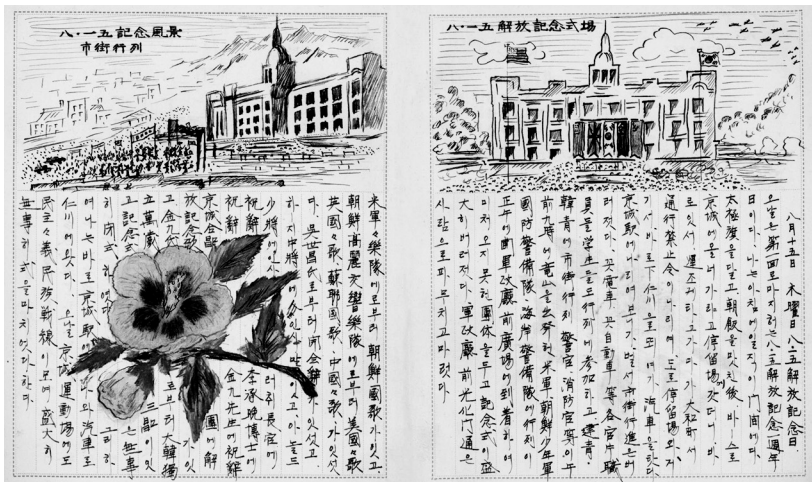


図4 I氏の日記：八・一五解放記念日（1946年8月15日）

庁舎)の建物中央に星条旗、ユニオンフラッグ、太極旗、晴天白日旗、ソ連邦旗が掲げられ、両脇のポールには星条旗と太極旗が最も高く掲げられ、多くの人々が式典に参加していた。それはまぎれもなく米軍政が演出した「八・一五解放記念」の一大ページェントだった。I氏は、この「八・一五解放記念日」式典の光景を日記に描きながら、だれが解放直後の政治を主導しているのかを自覚していたであろう。

一方、米軍政や李承晩・金九とは異なる国家・社会建設をめざしていた左派勢力についての記述は多くない。たとえば「八・一五解放記念日」の最後のくだりに、左派の統一戦線体である民主主義民族戦線が京城運動場に集まり、記念式典が盛大に催されたことを記しているほか（1946/8/15）、「南朝鮮労働党結成という甲〔看〕板ビラが貼られている」（1947/1/12）、「今日、左翼の人々は公設運動場で人民大会を開いた」（1947/7/27）と記している程度で、左派の動きを詳細に叙述していたわけではない。

ただし、解放直後に中道左派の指導者として朝鮮建国準備委員会、左右

合作運動を主導した呂運亨<sup>ヨウウンホン</sup>には関心を寄せていた。呂運亨は1947年7月19日に右翼青年に暗殺された。I氏は8月3日の日記に、ソウルで開催された「故夢陽呂運亨先生祭儀式」に参加し、「鍾路を経て故呂先生が亡くなった<sup>ヘフア</sup>恵化洞ロータリーに行き、また鍾路にもどって御英霊を拝見し、生きるということについて考えながら仁川にもどった」(1947/8/3)と書いている。わざわざソウルまで出向いて呂運亨の葬儀に参加したのは、左右の政治・イデオロギー対立の克服をめざし、「朝鮮自主独立」を訴えた呂運亨への共感があったからであろう。

以上のように、解放直後のI氏は、米軍政が繰り広げる壮大な政治的儀式や新聞・ラジオ報道の影響を受けて、米軍を歓迎し、李承晩・金九を支持する一方で、呂運亨の左右合作運動にも共感していたようだ。確かなことはI氏が「朝鮮解放」「八・一五解放」を最も強く感じ、「朝鮮自主独立」を念願していたということである。

## 4. 京電仁川支店での労働

### 4-1. 電気工としての仕事、職場への不満と適応

I氏は、京城電気株式会社<sup>13</sup>仁川支店で働く電気工だった。京電は、1933年の統計によると、全朝鮮電気事業の約32%、電鉄事業の約82%を占める「電燈・瓦斯・電車の事業を独占経営」する「一大会社」であった<sup>14</sup>。I氏は、1940年4月から京電電気技術員養成所で研修を受け、翌41年4月に京電仁川支店に入社した。

<sup>13</sup> 京電は1908年設立の日韓瓦斯株式会社に始まり、1909年韓美電気会社を買収、1915年京城電気株式会社と改称、1930年代には京城府営乗合自動車事業、京仁バス株式会社を買収、電気・運輸事業を独占経営する会社となった(『伸び行く京城電気』京城電気株式会社、1935年、8、9、12、13、50頁)。

<sup>14</sup> 前掲書、『伸び行く京城電気』、13、45頁。

解放を迎えた京電には、日本人から会社を接収するために、「本社系統の韓国人高級在職社員」らによる「業務推進委員会」、運輸部門の「電車課の監督」らによる「自治委員会」、朝鮮建国準備委員会系の労働者で組織された「従業員組合」などが組織された<sup>15</sup>。「大多数の従業員を包摂獲得」したのは「従業員組合」であり、管理職で構成された本社の「業務推進委員会」とは別に「接収委員会」を立ち上げて、日本人からの事務引き継ぎを行っていた。

ところが38度線以南の統治権力を掌握した米軍政は、「業務推進委員会」も「従業員組合」の「接収委員会」も承認しなかった。米軍政は、9月10日から15日まで日本人社長・穂積眞六郎との間に接収作業を行い、その後南朝鮮過渡政府樹立までは一切の会社業務を指揮、監督した。さらに、南朝鮮過渡政府樹立から大韓民国樹立までは韓国人幹部が会社を運営し、米軍政が顧問をとおして会社の経営に関わった<sup>16</sup>。このように解放直後の京電の経営体制は、ほかの多くの会社と同様に、めまぐるしく変わっていった。

次に、こうした中でI氏がどのような職務についていたのかを見てみよう。日記によると、京電仁川支店には工務係・修理係・試験係・調定係・業務係・会計係などの部署があり、I氏は試験係に配属されていた。ただし、解放直後には、日本人技師が引き揚げたことによる臨時の配置換えがあり、調定係の検針を後援する仕事にあたり（1945/10/6）、翌1946年1月に試験係の仕事に復帰した（1945/12/27）。京電の職位は、中間管理職と専門技術者としての職員、下位管理者と熟練技術者としての雇員、電工や乗務員など単純技術者としての備員に分かれていたが<sup>17</sup>、I氏は備員だったようだ（1945/11/28）。I氏の仕事の内容は、変圧器・計量器類の取付・取替・試験・

<sup>15</sup>『京城電気株式会社六十年史』京城電気株式会社、1958年、25頁。

<sup>16</sup>前掲書、『京城電気株式会社六十年史』、26、27頁。

<sup>17</sup> 오진석 「1940년대 전반 京城電氣의 인력구조와 인사관리」 『서울학연구』 제39호, 2010년 5월.



図5 I氏が勤務していた松嶋変電所（2012年8月1日、筆者撮影）

修理・盗用調査<sup>18</sup>などだった。1946、47年の日記および日誌には、仕事の内容が毎日書かれており、日記は仕事の記録でもあった。

I氏の賃金については正確にはわからないが、何箇所かに記述が見られる。まず、1945年12月の月給が初めて1000圓を越えたが<sup>19</sup>、「物価が高くて〔これまで〕同じだ」と書いている（1945/12/24）。1947年10月には3000圓を越えたと書かれていて（1947/10/25）、2年間で3倍以上になっていたことがわかる。また、「臨時物価手当」として70圓（1945/12/20）、700圓（1946/4/13、日誌）、800圓（1946/5/7、日誌）が支給されたと書いている<sup>20</sup>。1945年12月には、後述するようにインフレが昂進していたため、いくら月給が上がり「物価

<sup>18</sup> 日記によれば「最近、解放を迎えた関係で、四方の変圧器が盗難されたという報告が頻繁に入り」、試験係が調査しに出かけるという（1946/1/25）。

<sup>19</sup> 1946年3月の月給は1077圓だった（1946/4/1、日誌）。「物価手当」も支給されていたが、月給に含まれていた。

<sup>20</sup> ただし、1946年4月に「物価手当は除いて本給322圓7銭」（1946/4/25、日誌）、同7月には「月給310圓97銭」（1946/7/25、日誌）と書かれていることから、1945年12月に1000圓を越えた月給には「物価手当」が含まれていたと考えられる。



手当」が支給されても生活は楽ではなかったようだ。

解放から間もない10月のある日、「若い朝鮮人」の支店長が赴任してきた。どの係でもかつて日本人が座っていた椅子に「朝鮮人」が座り、すべての仕事が「朝鮮人」の手によって新しく始められることになった。しかしI氏は、「ぼくは将来どのようになるのか、幸被〔福〕になるのか、不幸被〔福〕になるのかという心配が多い」と将来への不安を吐露している（1945/10/6）。そして、翌年3月の「第五回生初労働記念日」には、「京電にいたら、ずっとこのままなのかもしれない」、給料をもらったら「すぐに会社を退職し、何か営業方面に挑戦してみるつもり」だと書いている（1946/3/18）。このようにI氏は、解放直後の混乱の中で、仕事と職場に不満を抱き、将来が見通せない不安な状態にあった。

I氏はそれでも仕事を辞めたわけではなく、徐々に職場に適応していった。その年の4月には、初めて試験係「組頭一組」に昇格して「組下」が1人配属された（1946/4/20）。5月には工務係「組長」に任命された。そのとき係長が、これからも「技術の勉強」が評価されるので「とにかく勉強して資格を持つ人になれ」と励ましてくれて、うれしかったと書いている（1946/5/3）。8月に「昇給辞令」を受け取ると、「会社の仕事がよくできるという声を聞いたことがない。だからもっと仕事をがんばって賞賛されるようにしましょう」（1946/8/24）と書き、仕事と職場に向き合うようになっていた。

## 4-2. 労働運動への消極的関与

解放直後に組織された京電従業員組合は、1945年11月5日、朝鮮労働組合全国評議会（以下、全評）結成大会に参加し、以後「全評朝鮮電気労働組合京電従業員組合」を名乗って、全評の中軸勢力となった<sup>21</sup>。同組合は、「月

---

<sup>21</sup> 前掲書、『京城電気株式会社六十年史』、38頁、中尾美知子・中西洋「米軍政・全評・大韓労総：朝鮮‘解放’から大韓民国への軌跡」『経済学論集』49-4、1984年1月、92頁。



給者」は8割、「日給者」は6割5分の給料引き上げを要求する賃金闘争や、出退勤前後の「交通整理奉仕活動」などを展開していた<sup>22</sup>。

京電仁川支店でも同じ時期に労働者が独自の組織を結成し、労働運動を始めていたことがI氏の日記からわかる。1945年暮れの日記によると、会社に「京電々工に告ぐ」という宣伝ビラがはられていた。そこには「一. かつての日本帝国主義下の電工の待遇、二. 親日派青廃止〔清算か?〕に関すること、三. 電工同盟の使命」などについて書かれていた(1945/12/22)。I氏は「会社規則に違反する者、副業を行う者が反省すべきこともあった。本当にわれわれ電気工に対するよいビラだった」と書き、ビラの内容を肯定的に評価している。この時すでに「電工同盟」という組織が存在し、電工の待遇の改善や親日派の清算を要求していたのである。この「電工同盟」という組織は、「全評朝鮮電気労働組合京電従業員組合」の影響下にあったようだ。

続いて年が明けた1月20日には、「京電仁川支店電工会」が結成された。12月の日記に記されている「電工同盟」が「電工会」となったものであろう。I氏は、日曜日であったにもかかわらず「電工会」結成式に参加し、会長、副会長、宣伝部など幹部の選挙では親しい同僚のR氏やP氏も当選したと書いている。「電工会」の目的は、「かつて日本奴らイルボンムの下にいたすべての被圧迫電工が解放され、いまこそ羽をひろげて団結しよう、そして建国のために働こう」ということだった。これにI氏は「ほんとうに立派なことだと思った」と賛意を表明している(1946/1/20)。

ところが同じ時期に、従業員組合に反対する勢力が登場した。1945年末から翌46年初めのモスクワ三相会議決定での信託統治をめぐる政治的攻防が繰り広げられる中で、京電内でも、信託統治賛成を主張する従業員組合に対して、信託統治反対を主張する中級管理層の社員も活発に動き始め

---

<sup>22</sup> 中尾美知子・中西洋、前掲論文、92頁。

た<sup>23</sup>。1月26日には、中級管理層を中心とする従業員組合反対勢力が「協同組合結成大会」を開催し、信託統治反対と全評糾弾を訴えた。従業員組合側は「労働組合を誹謗」するものだとして反撃し、両者は対立することになったのである（1946/1/26）<sup>24</sup>。I氏はこの時点では、中級管理層が進めた協同組合結成については言及しておらず、従業員組合側を支持していたようである。

同年9月7日には「京電従業員会仁川支部」の結成式が開かれ、委員長および委員の選挙が行われた（1946/9/7）。「電工同盟」「電工会」が「京電従業員会」の仁川支部となったものと思われる。後述するように、この組織が9月末から10月初めにかけて仁川でのゼネストを主導した「南鮮総罷業闘争委員会仁川支会」の核となったようだ（1946/9/28）。

これに対してゼネスト後の11月23日には「大韓労総京電仁川支店分会」が結成され（1946/11/23）<sup>25</sup>、右派労働運動による巻き返しがなされた。この分会は、先の中間管理職中心の協同組合が母体となって結成されたものと思われる。I氏は、全評が主導したゼネストを批判して、この分会に参加することになった。I氏が「会社では朝から左か右かという言い争いが行なわれる。道路の塀や電柱には、左翼の三・一運動ポスターと右翼の巳未独立宣言ポスターが貼られている」（1947/2/28）と記しているように、2つの組合の対立は続いた。I氏自身は、分会に好意的だったのだが、積極的

---

<sup>23</sup> 中尾美知子・中西洋、前掲論文、93頁。両者の対立軸は、信託統治問題だけでなく、階級問題、親日派問題にもあった。つまり、おもに現場の労働者で組織されていた従業員組合は、賃金闘争、生活保証金分配において中級管理層と対立し、課長、係長クラスを「親日反動分子」とみなしていた。

<sup>24</sup> 中尾美知子・中西洋、前掲論文、93頁。

<sup>25</sup> 『京城電気株式会社六十年史』では、11月24日に「京電自治労働組合」が結成されたときとされている（38頁）。中尾美知子・中西洋論文もこれを引用しており（中尾美知子・中西洋「米軍政・全評・大韓労総（3）：朝鮮‘解放’から大韓民国への軌跡」『経済学論集』51-1、1985年4月、120頁）、結成の日付と組合の名称がI氏の日記とは異なる。ここではI氏の日記の記述にしたがった。

に活動したわけではなかった。1947年3月には大韓労総を脱退し、無所属となったと記している（1947/3/3）。

### 4-3. 同盟罷業への参加と批判

京電仁川支店では、解放直後から1947年末までに4回の同盟罷業が起こっていたことがI氏の日記からわかる。最初の同盟罷業は昇給問題をめぐるものだった。1945年11月28日、京電仁川支店では、支店長と係長は全額、工具は8割、傭員は20歳以上が6割5分という昇給発表が行われた（1945/11/28）。I氏を含む19歳以下の13名の傭員は、昇給の対象外とされたため、「同盟破〔罷〕業を行う決議文を支店長に突きつけて昇給を要求し、要求を受け入れない時は、われわれ19歳以下のものは仕事をしないことにしようとかたく約束した」。これに対して支店長が、本社側と昇給問題で交渉したが成功しなかったと伝えてくると、I氏ら13名はストライキを決行することになった。I氏は昇給がならなかったことに対して次のように書いている。

本当に腹が立って残念なことは、何のために会社に6年間も熱心に通ったのか〔ということだ〕。歳月が経てばよくなるだろうと思ってやってきたが、今日も昇給することもなく、いっしょに会社に入った者は勿論、後で入社した者よりも給料が少ないとは、こんなことがどこにあるか。ぼくはこのことを考える時、涙で前が見えなくなる。すべてが字を習わなかったためだと慨嘆し、身世打鈴をするばかりだ。（1945/12/3）

解放直後の激しいインフレの中でI氏がこのように身世打鈴〔自分の身の上的ことについて愚痴をこぼす〕をし、ストライキに参加したことは当然のことだったであろう。最終的には、ソウルでも同盟罷業が起こり、12月20日にはI氏ら13名の昇給が実現することになった（1945/12/20）。

第2回目の同盟罷業は、翌1946年1月末に起こっている。I氏が午前中の

仕事を終えて会社に戻ってみると、同盟罷業が起こっていた。同盟罷業の目的は、「人夫の〔増員〕要求と夜勤制限」だった。この同盟罷業は1月20日に結成された「京電仁川支店電工会」が主導したものでしょう。全員が帰宅して仕事ができない状態で、工務係・修理係の両係長は、たいへん混乱していた。I氏は、「仕事を一生懸命するように」「修理保〔補〕助員」として働くようにとの工務係係長の指示を受け、ストライキには参加せず、初めて「修理」の仕事をしたという（1946/1/30）。

それでも同年5月1日の日誌には「メーデー記念日」「今日は労働者の名節であるメーデーだ。会社は公休だ」（1947/5/1）と記し、工場の煙突、男女の労働者、赤旗、ハンマーとカマのイラストを描き、職場で昂揚していた労働運動に関心を持っていたことがうかがえる。

第3回目の同盟罷業は、9月末のゼネストだった。9月26日、京電従業員組合は、「一．食糧配給確保、二．待遇改善、三．団体契約権の承認、四．解雇絶対反対、五．共済会の協同管理」の五条件を会社側に提示したが<sup>26</sup>、これが受け入れられなかったため、28日正午より総罷業を決行した。ゼネストには京電仁川支店の約3000人も参加した<sup>27</sup>。I氏は28日の日記の冒頭に「南鮮総罷業闘争委員会仁川支会結成罷業闘争開始」と書いている（1946/9/28）。この日、京電仁川支店は総会を開いて委員長にG、副委員長にCを選出し、鉄道局とともにゼネストに突入した。

日記によると労働者側の要求は「一．家族には米三合、従業員には四合、二．物価手当二千元、家族手当六百円、三．無条件解雇絶対反対、四．共済会費は従業員会に委託すること、五．団体契約を履行すること」の五カ条で、新聞報道より具体的に記されている。I氏は、ゼネスト主導部のG委員長の「われわれの目的を一日も早く達成するためには、政治的闘争な

---

<sup>26</sup>『대중일보』 1946年9月27日、2面。

<sup>27</sup>『대중일보』 1946年9月30日、2面。

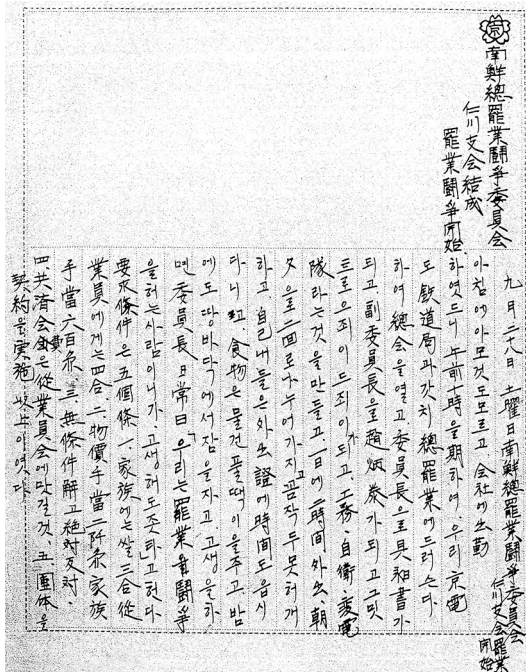


図6 I氏の日記：南鮮総罷業闘争委員会仁川支会結成罷業闘争開始  
(1946年9月28日)

ので、共産党など左翼のいかなる団体であるかにかかわらず、手を結んでゆかねばならない」との言葉を引用しており、ゼネストが全評との連携の下で進められていたことを知っていた。

I氏も3日目まで同盟罷業に参加していたが、4日目の10月1日、S氏が「われわれの罷業の目的は米とお金の要求であるわけだが、どうして政治的色体〔彩〕を帯びるのか」とゼネストを批判する声をあげた(1946/10/1)。I氏も

はや4日目になるが、何のうれしい知らせもなく、訪れるのは全評の

人たちだけだった。全評の人たちは赤色宣伝ビラをまいていった。委員長、副委員長は全評の人たちと何をひそひそ話しているのか、気分が悪く、たいへん気になった。

と書き、ストライキに批判的になり、S氏に賛同している。この日、I氏もS氏らと行動をともにし、S氏とその支持者10名は「罷業闘争委員会脱会相談会」を開き、脱会宣言書に署名、翌2日、罷業闘争委員会に脱会宣言文を提出し、復職した(1946/10/2)。脱会者は約100名に達し、ゼネストは瓦解した<sup>28</sup>。その後、警察とMPが来たが、委員長G、副委員長Cは逃亡したという。

第4回目の同盟罷業は、1947年3月21日から翌22日にかけて起こった(1947/3/22)。同盟罷業がどのようなものだったのか日記からはわからないが、I氏は24日に大韓労総員約20名が全社を包囲し、G、Mら罷業関係者を逮捕したと書き(1947/3/24)、「何人かの分子が煽動し、建国のためにはよくない同盟破〔罷〕業」だと批判している。

このように、I氏は、最初の同盟罷業には積極的に参加したようだが、2回目以降からは消極的になり、むしろ「建国のためにはよくない」として同盟罷業を批判するようになった。しかしその後も職場で昂揚する労働運動に無関心だったわけではなく、同盟罷業を主導していた親友のRのことを「罷業では事故はなかったのか」と気遣いもした(1947/3/23)。

このように解放から1年4カ月余りの間に、京電仁川支店でも「電工同盟」「電工会」など独自の組織が結成され、1946年9月のゼネストを頂点に4度も同盟罷業が起こっていた。最終的には挫折したとはいえ、労働者側は

---

<sup>28</sup>『大衆日報』では、京電仁川支店での罷業の終息について、「2日午後3時より職員と電工160名全員が就業した。それと同時に電気職員と電工一同は今般の罷業の過誤を自省し罷業闘争からの離脱を決意し、同日罷業脱退の声明書を発表した」と報道された(『대중일보』1946年10月4日、2面)。

組合結成と同盟罷業によって相当の成果をあげた。解放は人々がその権力を大きく拡大した瞬間だったことが I 氏の日記からもわかる。

## 5. 日常生活の諸相

### 5-1. インフレ、配給、生活難

解放直後の朝鮮ではインフレーションが進行していた<sup>29</sup>。I 氏も、1945年12月に「最近、米の値が日ごとに上がり、今日金額を尋ねると、白米一升が十一圓を越えた」、男子用のゴム靴1足が120圓、「ほんとうに驚くばかりだ」(1945/12/12)、その約1週間後には白米一升12圓、男子用のゴム靴が140圓の「高金」に達し、「この頃、ほんとうにたいへんな生活が続いている」(1945/12/20)と記した。I 氏が1946年初めに見た映画「偉大な人形師」(パティン/東邦劇場、1946/1/20)は4圓だったが、年末に見た「ロミオとジュリエット」(MGM/仁川映画劇場、1946/12/23)は20圓で、ちょうど5倍になっている。カミングスによれば、1945年9月に2升9.4圓だった米の値段は、翌46年9月には2800圓に高騰した<sup>30</sup>。I 氏の日記に記された物価高騰の様子はそれほどではなかったが、インフレがかなり進んでいたことがわかる。

I 氏の日記に最も多く記されたのはその日の仕事についての記述だが、その次に多いのは食糧配給に関するものである。南部朝鮮の占領を開始した米軍政は、当初は植民地期の統制経済を廃止して自由市場政策の導入を図ったが、インフレの昂進、地主・警察官・政府の官吏・富裕層による投機、密貿易などが起こると、重要物資の価格統制や配給制の再開などの経

<sup>29</sup> 김동욱 「1940-1950년대 韓국의 인플레이션과 安定化政策」 연세대학교대학원경제학과 석사학위논문, 1994년. 김동욱によればインフレは、日本経済との断絶と南北朝鮮分断による物資供給の委縮、総督府当局による通貨の乱発、米軍政の一時的な自由市場経済原則の適用など複合的に発生した。

<sup>30</sup> ブルース・カミングス(鄭敬謨・林哲訳)『朝鮮戦争の起源第1巻』影書房、1989年、275頁。



済統制を実施することになった<sup>31</sup>。

I氏は、日記に2種類の配給について書いている。1つはI氏自身が会社で受けとった配給で、最初の記述は1946年1月に焼酒ソジュの配給を受けたというものである（1946/1/12、日誌）。その後、洋服と軍手（1946/1/23、日誌）、米（1946/3/5、日誌）、小麦5升50圓、大麦1升15圓、靴下5足15圓（1946/10/24、日誌）、白菜100個（1個2圓50銭、1946/11/19、日誌）などの配給を受けたことが記されている。

もう1つは、「仁川生活品販売組合販売所」での配給に関わる記述である。I氏の家は1945年10月に「済物浦市指定糧穀店」として営業が許可され（1945/10/26）、仁川生活品販売組合<sup>32</sup>に加入し、その販売所での糧穀の配給に母とI氏が参加することになったようである。カミングスによると、1946年2月に1人当たり1日1合の米穀の配給制度が始められた<sup>33</sup>。I氏の日記では同年3月に最初の記述が見られ、9月の第16回配給から頻繁に記録されるようになる。日記によるとI氏は、配給物資の受け取り、運搬、配給、会計などの仕事を担当し、手数料や運搬費などを受け取っていたようだ<sup>34</sup>。仕事をした日には、配給した物資名と分量、配給を受けた人数、収入金額などをほぼ毎日記している。日記は仕事の記録でもあったが、配給の記録

---

<sup>31</sup> 米軍政は、1945年10月5日付の米軍政庁一般告示第1号で米穀、10月20日付の同第2号で生活必需品の自由市場の導入を宣言して自由市場政策を実施しようとした。しかし、生産の激減、物価の高騰などにより大衆生活が「一大危機」に「逢着」すると、1945年11月5日の石炭配給統制（一般告示第3号）を皮切りに、水産業用品（一般告示第4号）、米穀（一般告示第6号）などの統制経済を実施した。1946年5月には中央経済委員会、中央物価行政処、中央食糧行政処などの行政機関を創設し、経済統制を広範囲に実施し、物資配給機構の再整備を開始した（朝鮮銀行調査部編『四二八二年版経済年鑑』Ⅱ-16頁）。

<sup>32</sup> 配給所は、ソウル、釜山、馬山では大韓食糧公社の直営で運営されていた。それ以外の地域では行政庁が指定する小売商組合が食糧公社より糧穀を買入れて運営していた（朝鮮銀行調査部編『四二八二年版経済年鑑』Ⅱ-17頁）。

<sup>33</sup> カミングス、前掲書、275頁。

<sup>34</sup> I氏は、「会社に出勤し、即時、トンコゲ糧穀配給所に行き、小麦粉を配給した」（1946/9/23、日誌）と書き、平日の昼間も会社の仕事をしないで配給の仕事をすることもあった。

でもあったのだ。

仁川生活品販売組合での配給は、およそ以下のようなものだった。日記には1947年12月の第51回配給まで記され、毎月約2回ないしは3回（1回当たり4日間から8日間）、約3000人から4000人を対象に配給が行われた。配給物資は米、小麦粉、小麦、大麦で、1人当たりの配給量は、たとえば第31回（1947年2月）配給では、「白米1人当10日分2キロ175グラム、小麦粉1キロ200グラム」、1人1日当たり米217.5グラム、小麦粉120グラムで、非常に少ないものだった<sup>35</sup>。配給物資は朝鮮内だけでは調達できず、「小麦粉は美



図7 I氏の日記：労働と配給の記録（1947年2月）

<sup>35</sup> 文字通り1人当たりか、家族の代表1人当たりかは、日記からはわからないが、「1人当の配給量は満足なものではなく、不足分については依然として自由市場に依拠せざるを得」ず、「解放後の糧政第1年は南韓が食糧不足地帯へと急速に転落した重大な年」だった（朝鮮銀行調査部編『四二八二年版経済年鑑』I-64頁）。

国から輸入したもの」(1946/9/15、日誌)と書かれたように、アメリカの剰余物資が大量に流入していた<sup>36</sup>。それでも、配給物資が不足して配給が中止になることもしばしばあった。

このように物価が高騰し配給物資も不足する中でI氏は、副業を始めたようだ。1946年7月23日「京電入社後副業開始日」には、松峴町66番地某老宅に電灯1灯の増設工事をして400圓もらい3人で分配した。副業はすべきでないと思っていたが、生活難で「しかたなく、今日始めて手を染めた」(1946/7/31)という。電気工事先で日用品や食糧をもらい、生活の足しにすることもあったようだ<sup>37</sup>。

こうした食糧難の中で、1947年11月にI氏は次のように記している。

某戦災民収容所で凍死体を見た。1人の70過ぎのハルモニは飢えと寒さで凍死したのだ(1947/11/18)

飢餓と寒さで死ぬ人もいたのである。

## 5-2. ソウル行き、映画・演劇

I氏の休日は、土曜日の午後と日曜日、そして祝祭日で、家で部屋の掃除をしたり「理髪」「沐浴」をしたりして過ごす日が目立つ。会社の宿直や、1946年の秋からは配給の仕事で休日がつぶれることもあったが、家で過ごすことが多かった。

その一方で、休日に活発に活動していたこともわかる。会社の野遊会に参加したり、冠岳山クァナクサンを登山したりもしているが、注目すべきはソウル行き

---

<sup>36</sup> 1947年11月までの統計によると、配給された米穀のうち約44%が輸入品だった(朝鮮銀行調査部編『四二八二年版経済年鑑』I-64頁)。

<sup>37</sup> 例えば、染色会社で上着をもらい(1946/7/23、日誌)、農家ではほうれん草をもらった(1946/4/10、日誌)。

で、1946年には5回、47年には2回出向している。すでに紹介した「三一運動独立宣言記念日」(1946/3/1) 式典のほか、5月にはソウルの「デパートで万年筆も買った」(1946/5/8、日誌)。その4日後には、姉、弟妹を連れてチャンチャンウォン昌慶苑チヨンナムに行き、「全南朝鮮農楽大会」を見物している(1946/5/12)。8月には「八・一五解放記念日」にソウルに行った(1946/8/15)。1947年は、3月の同盟罷業の日に「いくつかの百貨店に入ってみて、鍾路の裏通りのケウル市場を鍾路三丁目から東大門まで」歩き(1947/3/22)、8月には「故夢陽呂運亨先生蔡儀式」に参加した(1947/8/3)。

I氏は、ソウルの街を歩き、百貨店をめぐる近代的な都市の雰囲気を感じたいということもあったのかもしれない。だが、「三一運動独立宣言記念日」「八・一五解放記念日」式典、「全南朝鮮農楽大会」「故夢陽呂運亨先生蔡儀式」はいずれも解放と関わりのある事柄で、I氏は朝鮮解放を体感することを重視していたものと考えられる。

もう1つの休日の活動は、映画や演劇などの観覧である。1946年の日記帳の巻末にある「西紀一九四六年度／檀紀四二七九年度／映画及演劇観覧記録」から、I氏は1年間に50本、月平均4本から5本の映画、演劇などを観たことがわかる<sup>38</sup>。1947年はやや減るが38本の映画、演劇を観ていた。1945年の日記帳の巻末の「昭和二十年度 映画及演劇観覧記録」にも、1、2月の2カ月間に11本の映画、演劇などを観たことが記されていて、植民地期から映画・演劇を観ていたことがわかる。

1946年に観た映画は29本(アメリカ23、ドイツ3、フランス2、中国1)で、その大部分が「真珠の首飾り」(6/17、*Desire* <1936>)、「サンフランシスコ」(7/8、*San Francisco* <1936>)、「青い制服」(8/24、*Under Pup* <1939>)、「エイブ・リンカーン」(9/10、*Abe Lincoln in Illinois* <1940>)、「ロミオとジュリエット」(12/23、

---

<sup>38</sup> I氏の遺族C氏によると、仕事現場としての劇場から無料券をもらったことがきっかけで映画・演劇を観るようになったという(2012年3月9日、筆者によるインタビュー)。

表1 1945年1～3月にI氏が見た映画

観覧日	題目	製作所(製作国)	映画館	俳優、出演者	料金
1.03	ル・バル(舞踏会)	(仏蘭西)	仁川映画劇場	Danielle Darrieux	50銭
1.07	モンデジュール相続者	(仏蘭西)	瓢館		無料
1.14	肉弾挺身隊	大日本映画	瓢館	水島道太郎	
1.25	アルプス槍騎隊	(伊太利)	東邦劇場		
1.26	演芸慰問会		京城中央劇場	金信栽、李花子、徐月影、白年雪、崔雲峰	
1.28	熱砂の花園	オーケー朝鮮歌劇団	愛館	宋達協、李鐘哲	
2.01	音楽の進軍隊	東宝映画	仁川映画劇場	岡譲二、中村メイコ	
2.11	霧街里	青春座	愛館	陳娘、韓一成	
2.13	隊長プーリバ	(仏蘭西)	瓢館	Danielle arrieux, Harry Baur	
2.22	芝居道	東宝映画	愛館	長谷川一夫、山田五十鈴	
3.11	電撃出動隊	東宝映画	瓢館		無料

*Romeo and Juliet* (1936) などの「美国」映画だった。例えば、MGM (Metro-Goldwyn-Mayer) 社製作の「踊るホノルル」(8/1、*Honolulu* (1939)) を観て「エリナー嬢のタップダンスには本当に驚いた」と書いている (1946/8/1)。また、「エイブ・リンカーン」は「映画に国文〔ハンゲル〕が付けられたのは初めてで、慣れなかった」と書き、字幕が付けられた映画だったこともわかる (1946/9/10)。ほかに「美国軍務省〔アメリカ海軍、海兵隊〕が製作した教育・文化映画「硫黄島決戦記」(7/10、*To the Shores of Iwo Jima* (1945)) を観ている。I氏は、これらの「美国」映画を基本的に「とてもおもしろい」と感じ、映画を通して「美国」への関心や親近感を持つようになった。

ただし、「美国」映画だけをみていたのではなく、映画「安重根義士」<sup>アンジュンゲン</sup> (朝鮮コリア映社, 5/30) や、自由劇場の「望郷」「流浪三千里」、白頭山劇団<sup>ベクトッサン</sup>

黄金座の「長恨夢」「初恋(悲劇)」「朝鮮のオモニ」、前高協革命劇場の「北緯三十八度戦」などの演劇・歌劇、そのほかに白馬曲芸団の「空中サーカス・歌のパロディー」(2/20)、帰還者芸能隊の「舞踊・慢劇・才談・歌謡」(12/13)、全仁川芸術の「総合コンクール大会(男女)舞踊・声楽」(12/27)など、朝鮮のものも観ていた。I氏がそれらの朝鮮映画・演劇を観て何を思ったのか知りたいところだが、残念ながら感想は書かれていない。

I氏は解放直後の生活難の中にあって、驚くほど多くの映画・演劇を観ていた。I氏にとって映画や演劇は娯楽であったが、その一方で、そうした多くの映画や演劇を通して激動する時代と世界に触れていたのである。

表2 1946年にI氏が見た映画・演劇

観覧日	題目	製作所(製作国)	映画館	俳優、出演者	料金
1.14	踊る上海	上海映画社 (中国)	東邦劇場		4圓
1.15	望郷	自由劇場	愛館	韓一松、卞基鍾	7圓
1.21	偉大な人形師	パテイン(美国)	東邦劇場		4圓
1.23	プラーグの大学生	Tobis(独乙)	東邦劇場		3圓
2.05	長恨夢	白頭山劇団黄金座	愛館		10圓
2.13	流血の街里[市街]	MGM(美国)	東邦劇場	Charles Starrett	5圓
2.15	南大門楽劇団	コンクール大会	愛館	太平歌手総出演	10圓
2.17	晩春の曲	UFA(独乙)	仁川映画劇場		4圓
2.18	八道遊覽、港の一夜	白鳥歌劇団	愛館	全玉(悲劇女王)	10圓
2.20	新人歌手コンク ール大会	青春スウィング ショー	仁川映画劇場		8圓
2.20	空中サーカス、歌 のパロディー	白馬曲芸団	上仁川假劇場		6圓
3.14	家なき子	(仏蘭西)	東邦劇場		6圓
3.16	多情多恨、春を乗 せた音楽列車	羅美羅歌劇団	愛館	朴玉草、李藝星	10圓

観覧日	題目	製作所(製作国)	映画館	俳優、出演者	料金
4.02	君と暮らせば	メトロポール (独乙)	仁川映画劇場	Annabella	6圓
4.04	アラスカの熱情	Republic(美国)	仁川映画劇場	Richard Allen	7圓
4.07	鉄腕ターザン	バーロー(美国)	東邦劇場	Herman Brix	4圓
5.11	シカゴ	20世紀 FOX(美国)	東邦劇場	Tyrone Power	10圓
5.22	安重根義士	朝鮮コリア映社	素砂振興館	青春劇団総出動	8圓
5.30	北緯三十八度線	前高協革命劇場	愛館	沈影、金蓮實	10圓
6.01	初恋(銀の靴)	Universal(美国)	東邦劇場	Deanna Durbin	10圓
6.17	真珠の首飾り	Paramount(美国)	東邦劇場	Gary Cooper	10圓
6.24	海鷲	(美国)	東邦劇場		10圓
6.28	貿易風	(美国)	仁川映画劇場		10圓
6.29	愛と罪	春秋歌劇團	愛館		15圓
6.	初恋(悲劇)	白頭山劇団黄金座	愛館	黄金座スター総 出演	15圓
7.02	流浪三千里	自由劇場	愛館	卞基鍾、韓一松	15圓
7.03	ターザン砂漠へ行く	BWB(美国)	仁川映画劇場		10圓
7.08	サンフランシスコ	MGM(美国)	東邦劇場	Clark Gable	10圓
7.10	硫黄島決戦記	軍務省(美国)	東邦劇場	勇敢な美軍	15圓
7.12	仏蘭西座	ACE(仏蘭西)	仁川映画劇場	Pierre Fresnay	10圓
7.14	朝鮮のおモニ	白頭山劇団黄金座	愛館	黄金座スター総 出演	15圓
7.20	雷雨(中国演劇)	楽浪劇会	瓢館	黄澈、李夢	15圓
8.01	踊るホノルル	MGM(美国)	東邦劇場	Eleanor Powell (タップダンス の女王)	10圓
8.07	家庭、処女の歌など	ピクトリーレ ビュー団	愛館		15圓
8.24	青い制服	Universal(美国)	東邦劇場	グロリア・ジーン	10圓
9.03	人知らぬ思想 (第1回公演)	盲啞劇場	愛館	聾啞者一行	15圓
9.08	パンア <sup>ネリョン</sup> 打鈴全七景	セビョル歌劇団	瓢館	セビョルスター 出演	15圓



観覧日	題目	製作所(製作国)	映画館	俳優、出演者	料金
9.10	エイブ・リンカーン	RAO(美国)	東邦劇場	Raymond Massey	10圓
9.20	悪魔	MGM(美国)	東邦劇場	Lionel Barrymore	10圓
10.01	郷愁の曲	Tobis(独乙)	仁川映画劇場	Marta Eggerth	10圓
12.04	蒼空駆ける恋	MGM(美国)	東邦劇場	Clark Gable	15圓
12.05	悪魔の深海	Paramount(美国)	東邦劇場	Gary Cooper	15圓
12.06	馬鹿童七、アリラン踊る12の峠	羅美羅歌劇団	愛館	金福順	20圓
12.13	舞踊、慢劇、寸談歌謡	帰還者芸能隊	仁川映画劇場	孫一平、李和	20圓
12.16	わが家の楽園	Colombia(美国)	瓢館	Jean Arthur, Lionel Barrymore	15圓
12.21	銀の靴	Universal(美国)	仁川映画劇場	Deanna Durbin	20圓
12.23	ロミオとジュリエット	MGM(美国)	仁川映画劇場	Norma Shearer, John Barrymore	20圓
12.27	総合コンクール大会(男女-舞踊、声楽など)	全仁川芸術	愛館	咸世徳 審査	20圓
12.30	愛の歌	Universal(美国)	東邦劇場	Deanna Durbin	15圓

I氏が観た映画・演劇には、中国映画「踊る上海」や中国演劇「雷雨」があるが、日記には中国関連の記述も見られる。映画・演劇のほかにも、「中華浴湯」(1946/1/13、日誌)「中国人湯」(1946/11/10)で沐浴したこと、ある中国人にほうれん草を一貫もらったこと(1946/4/10、日誌)、農業を営む中国人の家で絶縁測定をしたこと(1947/10/15)、電気工事先の主人の招待で「中国料理屋に入り、おいしい料理をたくさん食べた」(1947/12/30)などと書かれている。とくに「中国うどん」(1947/12/15)「中国料理」(1947/12/22)はときどき食べたようだ。仁川は華僑が多く居住する都市でもあり、I氏は華僑や中国的なものにも慣れ親しんでいたことがわかる。

### 5-3. 植民地支配の遺産、氾濫する「美国」

I氏は1945年12月8日の「帝国主義日本が英米国に宣戦を布告した日」に、「考えてみればこのうえなく愚かなことだった。神社参拝だの式だの、ほんとうに身の毛がよだつようだ」と記して、植民地支配に対する怒りを表明していた。植民地支配から解放された朝鮮では、I氏だけでなく、誰もがそれぞれの体験に基づく怒りをもっていた。しかし、そうした怒りとは別に、植民地期に身に付けさせられた言葉や考え方は、解放とともに消えてしまったわけではなかった。

I氏の日記には、平仮名や片仮名は1945年の日記帳の巻末の「昭和二十年度 映画及演劇観覧記録」のほかに2カ所で使われているが、その他には見られない。ただし、「日本語」の漢字は多く使われている。1945年には朝鮮語の「美国」は「米国」と書かれている。「京城」「本町通」「昭和町」「明治町」「本町四丁目」などの地名や通りの名称はほとんど植民地期に使われていたもので、「大山氏」「松本信雄君」「庶務木山」などの創氏名も使われている。「夕食」「弁当」「駐在所」「小麦一人一升大麦一人3合」などの普通名詞も多く見られる。また「岬ス(バス)」「대마-트(デパート)」など日本語をハングルで表記したものもある。こうした「日本語」は、1945、46年の日記にはいたるところで見られるが、翌47年頃にはしだいに減っていく。

1945年10月にI氏は、「体錬に励み立派な体格になるように決心」し、「体育精神」を鍛えていくべきだと書いている(1945/10/31)。「八・一五解放記念日」などの「慶祝日」のほかに、「禁欲生活約則〔束〕日」「月末整理及反省日」「定期預金日」「入浴日」「体育日」「学務日」「栄養食日」などを定めて規律秩序を守ろうとする姿勢も見せている。このような「体錬」「体育精神」、規律秩序の遵守は、かつて植民地権力が戦時総動員を目的として人々に強要していた「皇民化」のための規律秩序の一側面だと考えられる。「日本語」や植民地支配下で強要された「精神」や規律秩序は、解放とと

もに消滅したのではなく、解放後の人々にも引き継がれていたのである。

一方、I氏にとって、「帝国主義日本」を追い出し、「朝鮮解放」を支援してくれたように見えた「美国」の存在はますます大きくなっていった。すでに紹介したようにI氏は、米軍の仁川上陸時には「WELCOME U.S. ARMY」と日記に大書し、新聞・ラジオや「八・一五解放記念日」などで「ホッジ中将」ら米軍政首脳陣が行った演説の内容を書きとり、それを肯定的に論評している。1947年7月の「美国独立記念日」には、「美軍はとても喜ばしように市街を行進し、夜には花火を打ち上げ、演芸や拳闘」を楽しみ、「農楽隊など韓人も参加して愉快地遊んでいる」と書き（1947/7/4）、9月の「故ラーチ軍政長官葬儀日」にも注目している（1947/9/16）。これらの「美国」についての記述は、I氏にとって「美国」の存在がどれほど大きいものであったかを示している。

こうした「美国」の存在は、政治的イベントにおいてだけでなく、I氏の生活の中にも入りこんでいた。それはクリスマスに描かれたイラストによく表れている。1945年のクリスマスには「今日は世界、西洋の名節であるクリスマスの日だ」と書き、1頁を使ってイラストを描いている。上段には、星条旗と太極旗、「Merry X 마스/Christmas」、下段には「檀君四二七八年十二月二五日/西紀1945年/朝鮮解放万歳/李承晩博士/金九先生/万歳」の文字と槿の花が描かれている。45年のクリスマスから公休となったようで、47年の「救主聖誕 メリークリスマス」は「学校は勿論、全仁川の各官公社はすべて休みである。今日は電気制限もなく、夜明けにはキリスト教信者は集団で賛美歌を歌いながら家々をまわっていた」（1947/12/25）。ここで「美国」は朝鮮解放をもたらした救い主であることが暗示され、その意味でのクリスマスがI氏や全仁川の人々によって慶祝されたのである。

また、すでに紹介した「美国」映画の鑑賞はI氏の生活の一部となっていた。1946年からの配給の記録は、「美国洋服」「美国洋靴」「美国小麦粉」



図8 I氏の日記：クリスマス（1945年12月25日）

「美国食料品」などの言葉であふれている。I氏は日常生活の中で頻繁に「美国」商品と接していたのである。

I氏は、英語の勉強にも励んだ。米軍が上陸してきた1945年9月には「一日も早く英語を学び、美国軍人と楽しく会話」したいと思い、「青山学院初等英語講習所」で英語の勉強を始めた（1945/9/28）。1947年にも「済物浦英語講習所」で、週2回から3回ほど英語の学習をしている（1947/4/10）。

I氏は、仁川に上陸してきた米軍の最新装備に驚き、米軍政が主導した政治的イベントにも参加し、「美国」映画を鑑賞し、「美国」商品の配給を受け、英語の勉強に励んでいた。これは、直接的にはI氏が「美国」の有形無形の文物に関心を持ち、それらを積極的に受容しようとしていたということだが、全体的にはI氏の身の周りに「美国」が氾濫していたという

ことである。

#### 5-4. 生活の底流をなす伝統

だからといって、I氏の日常生活のすべてが「美国」の文物でおおわれていたわけではない。板垣竜太が1941年の労働者の日記を分析して述べているように<sup>39</sup>、I氏の生活においても「伝統的」なものが強い力をもっていた。

その1つは暦に表れている。I氏は日記の日付を陽暦で付けており、会社の仕事や配給などは基本的に陽暦の時間の中で過ごしていたが、陰暦を重視することもかなりあった。1946年日誌の巻末に整理された記念日表によれば、陽暦で過ごすものは「三月一日 独立宣言日」「三月十八日 生初労働記念日」「五月一日 メーデー」「五月五日 子どもの日」「八月十五日 朝鮮解放日」「十月九日 ハンゲルの日」「十二月二五日 Xマス」で、陰暦は「正月一日 明節」「四月八日 釈尊降誕日」「五月五日 端午」「七月七日 七星殿祈奉日」「秋夕」「九月二七日 開天節」、I氏と家族の誕生日、父の命日である。つまり、おおよそ直接家族の生活に関わるものは旧暦で過ごしていたといえる。

たとえば正月については、1946年1月1日の「陽暦明節」には「今日は明節なので会社はもちろん公休で、商店や自由市場は、明節であり信託統治反対示威運動が行なわれるということですからすべて閉店していて、道路は閑散としていた」としか書かれていない。それに対して2月2日の旧正月「陰暦明節」の本文にはI氏は次のように書いている。

---

<sup>39</sup> 板垣竜太「戦時体制下ソウルの職工日記（1941年）について」（油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会編『朝鮮半島のこぼれと社会：油谷幸利先生還暦記念論文集』明石書店、2009年）。

今日は朝鮮の解放後、初めて迎える明〔名〕節、正月だ。もちろん会社は公休で、商店や工場も閉まっている。朝は家族が集まり、トック〔朝鮮の雑煮〕を食べたが、餅<sup>トック</sup>をかみしめる音が、平和だ、平和だといっているように聞こえた（1946/2/2）。

こうして午前中は家族団欒で過ごし、午後は友人が訪ねてきて酒とトックでもてなした。つまりI氏とその家族は、陽暦の正月よりも旧正月を重視していたのである。

I氏の父の命日も陰暦（6月2日）だった。父親は4年前に別世しており、1946年は陽暦の6月30日が命日だった。I氏は「夜が開けると祭祀が始まった。ぼくは静かに目を閉じて、父のことを考えた。実に悲しく、会いたいと思った」（1946/6/30）と早朝から祭祀が行われたことを書いている。

2つ目は、病気への対応に表れている。まずI氏や家族が病気のときは「道立病院」<sup>ハム</sup>「咸内科」<sup>ハニョクパン</sup>「平和医院」などで注射や薬を処方してもらっていたが、その一方で「漢薬房」もよく利用していた。たとえば、「漢薬房」で「補薬一劑」を注文し（1946/4/14、日誌）、「松峴町大濟堂クルムタリ医院」では「すべてが陽の気が不足しているからです。薬を3、4回飲めば健康になるでしょう」と診断を受け、「薬を一劑<sup>40</sup>、または二拾服を二百圓で買い、毎朝夕に服用している」（1946/3/31）と書いている。

さらにI氏の日記には、病院や漢方薬で病気が治らない場合、どのように対処したかが記されている。1946年9月初旬に母が病気にかかり、「漢薬・針・注射・平<sup>ブダッコリ</sup>당거리<sup>41</sup>」などすべて試してみたが、治る気配がなかった。そこでI氏は、有名<sup>ファンヘド</sup>な黄<sup>ムーダン</sup>海道出身の巫堂を訪ねて聞くと、「家の大<sup>テ</sup>監<sup>ガムニム</sup>様<sup>42</sup>

<sup>40</sup> 漢方の煎じ薬20服。

<sup>41</sup> 1人の巫（ムーダン）によって行われる比較的簡単な厄払い。

<sup>42</sup> 巫（ムーダン）が「クッ」をする時に、家や土地、木、石などに宿っている神やその他の神々を崇めて呼ぶ言葉。

がお怒りになっており、祖先がお出ましになるところを踏まれているので、<sup>クッ</sup>足をすればすぐに全快するだろう」という(1946/10/6)。こうして10月と11月に「クッ」を行うことになった。「クッ」の様子は次のように記されている。

ヨンジョン ムーダン  
永宗の巫を呼び、キンデオップ様<sup>43</sup>をお迎えして安置した。その後、場所を外の倉庫に移してお祀りした。ぼくは一日も早く母が全快して健康になり、家内が無病息災で、繁栄しますようにと祈った。(1946/11/4)

このように病気が病院や漢方薬で治らない場合には、「クッ」を行うことによって対処していたのである。

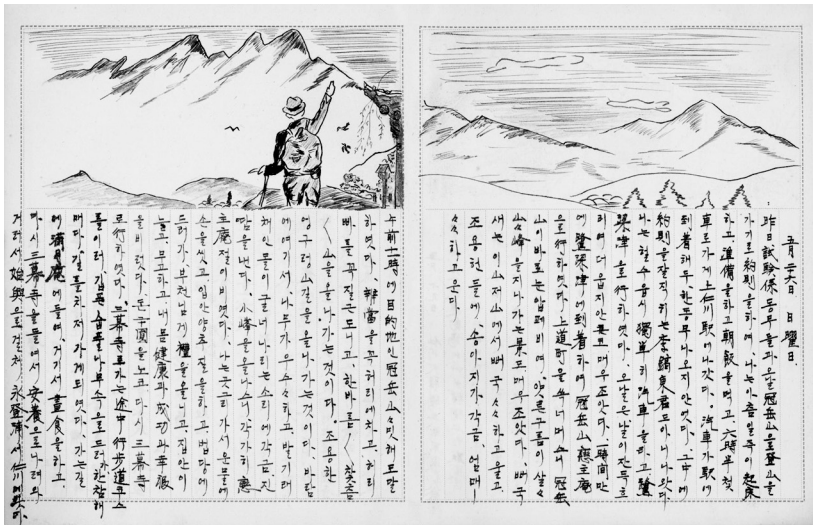


図9 I氏の日記：冠岳山登山と仏教(1946年5月26日)

<sup>43</sup> 原語は긴대업님。蛇の神だとされる。



もうひとつは、I氏の信仰に見られる。1946年の旧暦4月8日「佛釈尊降誕日」には蓮のイラストを描き、会社に出勤する前に「御守尊」に香をあげ、「仏様に、将来の成功と健康、そして家内が無病息災であることを心より祈った」(1946/5/8)。I氏は「佛釈尊降誕日」だけでなく、仕事の現場の近くにお寺があれば立ち寄って参拝したし、何か問題が起きれば仏様に祈願した。冠岳山を登山したときも「三幕寺」「應主庵」「満月庵」に立ち寄って「仏様にお参りし、家内の繁栄と無事故を、そして自身の健康と成功と幸福をお祈りした」(1946/5/26)。また、「御守尊」は常に身につけていたという(1946/5/8)。

I氏は仏教とともに、七星神も信仰していた<sup>44</sup>。旧暦「七月七星日」には次のように記している。

家ではミルトック〔小麦粉で作った餅〕やチャルシルトック〔もち米で作った餅〕をこしらえて告祀ツカサを行った。ぼくも仏殿と七星殿に御香をあげた。そして心より、自身が将来成功し、日々健康で、会社勤務も無事であり、家内も繁栄し、家族も健康であり、米穀の配給業においても無事故でありますようにとお祈りした。

ぼくは七星様の子孫であることがよくわかっている。それゆえに七星様をほかの誰よりも尊重し、信じている。将来の成功への道においても、七星様がきっと助けてくださると信じている。(1946/8/3)

I氏の精神世界は、基本的には以上のような伝統的な生活様式、仏教、七星信仰などの民間信仰によって構成され、それらが日常生活の底流にあった。そうした信仰においてI氏が強く希望していたことは、自身の将来の

---

<sup>44</sup> 北斗七星信仰。人の禍福・生死をつかさどる七星神に、長寿、大願成就、平安無事を祈った。

成功や幸福であり、家族の健康や無病息災、繁栄だったのである。

## 6. おわりに―I氏にとっての「解放」

解放直後、仁川の電気工I氏は、朝鮮にやってきた米軍を歓迎し、「三一運動独立宣言記念日」「八・一五解放記念日」などの政治的イベントに参加して、「朝鮮解放」を喜び、「朝鮮独立」を願った。京電仁川支店では4度の同盟罷業が起り、I氏は当初はそれに参加していたが、しだいに批判的になり離脱した。生活面では、インフレと食糧物資不足の生活難の中で配給の仕事をする一方で、意外にも多くの映画や演劇を観ていた。また、「美国」映画や「美国」商品など有形無形の「美国」の文物を受容していた。しかし、I氏の日常の中で大きな力を持っていたのは、伝統的な生活様式や仏教・民間信仰であった。

それでは、I氏にとって「解放」とは何だったのだろうか。それは、解放後最初に迎えた旧正月に書いた「朝は家族が集まり、トックを食べたが、餅をかみしめる音が、平和だ、平和だといっているように聞こえた」(1946/2/2) という一文に最もよく表れている。「餅をかみしめる音」「平和だ、平和だ」は、I氏だけではなく、植民地支配と戦時体制から解放された人々が素直に持った気持ちであっただろう。その上で、大状況においては「朝鮮独立」を願い、小状況においては、自身の将来の成功や幸福、家族の健康、無病息災、繁栄を願うことだった。

ところがI氏は、それから4年後の1950年8月には、日記に次のように書くことになった。

朝鮮は日帝の奴隷植民地から解放された意義深い歴史的解放を迎え、  
平和な世界で暮らすことになったのだが、甘い平和の味を味わう間も  
なく、解放後満五年目に、他国とではなく白衣同族どうしが血を流し

戦争を引き起こし、〔中略〕実に遺憾千万だ。〔中略〕一日も早く戦争が  
終わり平和で自由で幸福な時が戻ってくることを心より祈願すること  
を、記念日に当たる所感とする。(1950/8/15)

I氏にとっての「解放」が、1948年以降どのようになっていくのかをさ  
ぐるものが今後の課題である。